

に若いとのことだ。(15)

足や高齢化が言われて久しい。統計の算定方法が時々変更されるので、同じ基準で比較するのは難しいが、りんごの栽培農家は1990年の2万5

年、農林業センサス)雇用労力も確保しづらくなっていると言われるが統計はない。

本県のりんご栽培面積は最大時から4800ha

## 5万トン時代へ 青森りんご輸出

49

# 生産維持へ人材確保



次世代の技術として注目されている高密植なわい化栽培。省力・多収穫が期待され、国の輸出力強化戦略で取り上げている(青森市の原田種苗提供)

# 幅広い層の活用検討を

んなマジックが潜んでい るのだろうか。

考えられるのは、わい 化栽培の普及によって単

位当たりの収穫量が上が つたことだが、積雪の多 い地域には普及していな いため、県全体のわい化 面積率は23%でしかな い。結局青森りんごの潛 在力ということなのだろう。

しかし、担い手不足対 策は待ったなし。この 問題は他産業も抱えてい る。産地でしっかりとし た受け皿をつくって、あ らゆる手づるで人を集め ないと産地はじり貧だ。 大規模経営、農業法人化、 Uターンなどに可能性があるようだ。

生産基盤を維持するの は結局人材確保といつこ とだろ。

(県りんご輸出協会事務 局長 深澤守)

024戸から2010年 には1万5273戸と約 1万戸減少している。(2 016年、県りんご生産 指導要領)

減少し、りんご栽培農家 は4割も減少しているに もかかわらず、生産量は 約30年間、47万t程度の 水準を維持している。生 産農家も栽培面積も減少 しているのに、一定の生 産量を確保している。ど

年齢は、63・8歳で北海 道に次いで全国で2番目

補助労力では、世界の リンゴ産地でアメリカに おけるメキシコ人、ニュージーランドにおけるオ セアニア島しよ国からの 労働力提供で成り立つて いる例がある。日本では 外国人労働者の受け入れ ができないが、研修生の 名目で最大3年間の滞在 が認められている。外国人労働者の導入のため、さらなる規制緩和の動き も出てきた。併せて学生 や主婦、シニア層などの 活用も真剣に考えてほし い。